



楽器の機能を付与した義手 "Musiarm"



尻尾の機能を付与する身体拡張装置 "Arque"

身体を自在にデザインできる未来へ

メディアデザイン研究科 教授

みなみざわこうた
南澤孝太

人は古来より道具を使って自らの能力を拡張してきました。眼鏡は目(視覚)を、電話は耳(聴覚)を、自動車は脚(移動能力)を、そしてAIは頭脳(思考能力)を拡張するテクノロジーであると捉えると、現代に生きる私たちは常にさまざまなテクノロジーを身にまとい、自らの身体を拡張しながら生活しているといえます。

私たちが進めている「身体性メディア(Embodied Media)※」の研究では、このような身体とテクノロジーの融合を通じてより良い生活・社会を創り出すことを目指して、人の認知や行動を拡張する技術を開発し、①人の身体感覚を時空間を超えて伝送し人と人とを繋ぐこと、②人と環境との身体的なインタラクションを制御し感情や行動の変容を生み出すこと、そして③人の身体そのものの拡張可能性を探求することに取り組んでいます。

2019年8月に発表した尻尾型の身体拡張装置「Arque」は、「人類が失った尻尾をあらためて手に入れたら、どのような新たな身体能力を

得られるだろうか」という問いから生まれました。単なるコミュニケーション媒体としての尻尾ではなく、身体の重心バランスを制御することで、高い場所での作業や重い物を持ち上げるときの重心コントロールの改善や、高齢者など身体のバランス制御が衰えている人の機能回復を目指しています。また2018年に発表した義手型の楽器「Musiarm」は、「腕を失っていても音楽を奏でたい」という義手使用当事者の想いを契機として当事者との共創により生まれました。義手そのものを楽器として設計することで、「健常者」の模倣としての装置ではなく、「なりたいたい自分」になるための装置を開発しています。

近い将来、人は時と場面に応じて、あるいは身体の不自由から解放されるため、テクノロジーを取り入れて自身の身体を自在に拡張するようになるでしょう。人の創造性が自らの身体をも変え得る時代が到来したとき、あなたはどんな身体を手に入れたいですか?*

※ <http://embodiedmedia.org/>